あ

あ（亜・〈阿・〈唖・〈痾・〈鴉）→【字音語の造語成分】

ア（略）㊀アジア。「中央―[5]」㊁アフリカ。「南(ナン)―」㊂（日本）アルプス。「南(ナン)―〔=赤石山脈〕連峰」 表記 ㊀は「亜」、㊁は「〈阿」とも書く。

あ[1]（感）㊀呼びかけの声。「―君、ちょっと」㊁急に△驚き（思い出し）などした時に出す、思わず発する声。〔㊀㊁とも「ああ」「あっ」とも言う〕

ああ[1]（感）㊀肯定・承知の意を表わす言葉。「―、そうでしたか」㊁物事に感じた時に発する叫びに似た声。〔感嘆・悲しみ・喜び・嘆きなどを表わす〕 表記 ㊁は、漢文では「〈嗚《呼」などと書く。

ああ[0]（副）㊀話し手・聞き手から離れて存在し、両者が共に認め得る事象や状態を指し示す様子。「あの人を見てごらん。―いう〔=あのような〕ヘアスタイルは珍しいね/なるほど―やって砂金を採るのか」㊁すでに話題になるなどして、話し手・聞き手が共に意識している事柄に含まれる事象や状態を指し示す様子。「お互いに年を取り、―〔=あのように〕しろと言われても、今は無理だろう/田中さんは―見えても、意外に頑固だ/あの二人は―なる運命だったのかもしれないね」㊂〔「―…こう…」の形で〕事柄の及ぶ範囲が多方面にわたり、的△がしぼれ（をしぼらせ）ない様子を表わす。「―だこうだと不満を並べる/―しろこうしろと言われても一度にできるわけがない/―言えばこう言うで、追及をのらりくらりとかわす」
⇩こう・そう・どう：こそあど

運用 話し手自身が過去を回想したりする時、経験した出来事などに含まれる事象や状態を指し示す場合にも用いる。例、「ああいう時こそ、もっと慎重に行動すべきだった」

あ

［亜］ ■一㊀…に次ぐ。「亜流・亜熱帯」㊁〔無機酸で〕酸素が一原子だけ少ないこと。「亜硫酸」 ■二（略）アジア（亜細亜）。⇩（本文）ア㊀

［〈阿］ ■一㊀ごきげんをとる。「阿世・阿諛(ユ)」㊁〔本来は中国で〕人を親しんで呼ぶ時の称。〔日本の「お」に当たる〕「阿父(フ)・阿Q」 ■二（略）㊀アフリカ（阿弗利加）。⇩（本文）ア㊁ ㊁阿波(アワ)国。「阿州」

［〈唖］ ことばを話すことが出来ない（人）。「唖者・唖然・盲唖・聾(ロウ)唖」

［〈痾］ 治りにくい病気。「宿痾・病痾」

［〈鴉］ カラス。「鴉鷺(ロ)・晩鴉・群鴉・帰鴉」

アーカイブ[3][1]〔archive〕㊀（記録として保存すべき）公文書。㊁公文書などの保管所。「アーカイブス[3][1]」とも。㊂〔コンピューターで〕複数のファイルを（圧縮して）ひとまとめにしたもの。また、その技術。

アーキテクチャー[4][1]〔architecture〕㊀建築物。建築術。建築学。㊁コンピューター システム全体の設計思想・構成方式。

アークとう(オ)[0]【アーク灯】〔arc=弧・弓形〕電流を通じた二本の炭素棒の間に白熱光を出させる電灯。

アーケード[1][3]〔arcade〕㊀「アーチ㊀」の有る通路。㊁〔商店街で〕日よけ・雨よけの屋根を付けた通路。

アーサかんど[4]【アーサ感度】〔ASA=**A**merican **S**tandards **A**ssociation〕アメリカ規格協会が定めた、フィルムや印画紙の感光度の標準規格。現在はイソ感度が一般に用いられている。アサ感度[3]。⇩イソ感度

アース[1]―する（自他サ）〔earth=大地〕㊀電気機器と地面との間に電路を作って、感電を避けたり 感度をよくしたりする△こと（装置）。「接地」とも。㊁故障のために電路が大地につながること。

アーチ[1]〔arch=弓形〕㊀洋風建築の回廊などで、内側は壁などを、外側は石柱などを支えとして、弓形の天井に作ったもの。㊁骨組をスギ・ヒノキなどの葉で包み飾った門。「緑門」とも。㊂〔野球で〕ホームランの俗称。「―をかける〔=ホームランを打つ〕/―攻勢・初―[3]」〔㊂は日本での特用〕

アーチェリー[1]〔archery〕洋弓（を用いてするスポーツ）。

アーティスト[1]〔artist〕芸術家。「アーチスト」とも。「ロック―・海外―」

アーティチョーク[4]〔artichoke〕夏、アザミに似た花をつける多年草。つぼみの一部を食用にする。地中海沿岸原産。和名、ちょうせんあざみ[5]。〔キク科〕

アート[1]〔art〕美術。芸術。「―デザイナー[5]・モダン―」

アートディレクター[5]〔art director〕演劇の美術的効果や広告のデザインなどについての責任者。

アートペーパー[4]〔art paper〕コーティング加工した、厚手の印刷用紙。「アート紙[3]」とも。

アーバン（造語）〔urban〕近代都市としての。都会風の。「近未来型の―ライフ/―デザイン[6]・―リニューアル[6]〔=都市再開発〕」

アーベント[1]〔ド Abend=夕方〕ある主題で特定の日の夜間に催される集会。「ベートーベン―〔=…の夕べ〕」

アーム〔arm〕■一[1]㊀〔建築で〕腕木。㊁腕のかっこうをした△物（部分）。受話器・ミシンの本体の部分など。■二（造語）腕。「―バッグ[4]・―チェア」 かぞえ方 ■一は一本

アームチェア[4]〔arm chair〕ひじ掛けの付いた、体を休めるのに適した作りのいす。「安楽いす」とも。「―にふんぞり返る」

アームホール[4]〔armhole〕洋服のそでつけ線。「そでつけ」とも。

アーメン[0][1][3]（感）〔ヘブライ āmēn=たしかに〕〔キリスト教で〕祈りの最後に唱える言葉。

アーモンド[1][3]〔almond〕中央アジア原産の落葉高木。種子は平たくて、卵形。食用にするものと薬用にするものとが有る。旧称、アメンドー。〔バラ科〕「―チョコレート[8]・―ケーキ[6]」 かぞえ方 一株・一本：一粒

アール[1]〔フ are〕メートル法における面積の単位で、一辺が一〇メートルの正方形の面積〔=一〇〇平方メートル〕。約三〇・二五坪に当たる。〔記号 a〕⇩ヘクタール

アールエイチいんし[7]【Rh因子】〔Rh=Macacus **Rh**esus（アカゲザルの学名）〕人間の血液の成分の一つ。Rh－（マイナス）型の母親がRh＋（プラス）型の胎児を妊娠した場合は、死産などを起こすことが有り、Rh－型の人がRh＋型の血液を繰り返し輸血された場合は、アレルギー症状を起こしたり 赤血球が破壊されたり することが有る。

アールエヌエー[6]【RNA】〔←**r**ibo**n**ucleic **a**cid〕リボ核酸。糖成分としてのリボースを含むものをいう。DNAの遺伝情報をもとに蛋白(タンパク)質の合成に関与する。

アールシー[4]【RC】〔←**r**einforced **c**oncrete〕鉄筋コンクリート。「―二階建て」

アールしてい[4][5]【R指定】〔Rは restricted=制限の意〕〔公開される映画で〕映倫が観覧を年齢により規制すること。対象となる年齢は、十五歳未満はR15＋、十八歳

未満はR18＋などと表示される。

アール デコ④〔フ art déco ← arts décoratifs＝装飾美術〕単純で直線的なデザインと大胆な色彩による芸術様式。一九一〇年代から三〇年代にかけてフランスで流行し、おもに服飾の分野に影響を与えた。

アール ヌーボー④〔フ art nouveau＝新芸術〕植物をモチーフにした軽快な曲線と色彩の芸術様式。十九世紀末から二十世紀初めにかけてフランスを中心にヨーロッパで流行した。

あい（哀・〈埃・挨・愛・〈隘・曖）→【字音語の造語成分】

アイ（造語）〔eye〕㊀目（の働きをするもの）。「―バンク・マジック―」㊁見て、ものの本質をつかむ能力。「カメラ―〔＝対象の切り取り方〕がいい／バッティング―⑥」

あい【合】（造語）㊀Ⓐ…全体の様子（から受ける総合的印象）。「雲―・柄―⓪・色―・風―」Ⓑその人とつき合っているうちに相互に感じとる好悪の感情。「情―・肌―・性―⓪」㊁その言葉によって表わされる要素に、それと深く関連する他の要素がいくぶん付加されることを表わす。「意味―・義理―・気味―⓪」㊂何かをするのに適した、その△時（場）の都合やそのものの程度。「潮―・程―・頃―・間―・場―・歩―・割―」

あい【相】（接頭）㊀〔名詞に冠して〕双方が互いに同じ関係に立つととらえられることを表わす。「―打ち・―方・―客・―先・―弟子・―乗り・―棒・―星・―持ち・―宿・―嫁」㊁〔用言・副詞に冠して〕動作・状態の△積極性（荘重性）を表わす。「療養―かなわず／―いましめる①-④・―済まぬ・―次ぐ・―半ばする・―成るべくは・―俟つ・―互いに①-⓪・―共に①-⓪・―近い①-②」

＊**あい**①【愛】個人の立場や利害にとらわれず、広く身のまわりのものすべての存在価値を認め、最大限に尊重していきたいと願う、人間に本来備わっているととらえられる心情。「親子の―〔＝子が親を慕い、親が子を自己の分身として慈しむ自然の気持〕／動植物への―〔＝生あるものを順当に生育させようとする心〕／自然への―〔＝一度失ったら再び取り返すことの出来ない自然を いたずらに損なわないように注意する心構え〕／学問への―〔＝学問を価値あるものと認め、自分も何らかの寄与をしたいという願望〕／芸術への―〔＝心を高めるものとしてすぐれた作品を鑑賞し、その作者としての芸術家を尊敬する気持〕／人類―③〔＝国や民族の異なりを超え、だれとでも平等に接しようとする気持〕・郷土―③〔＝自分をはぐくんでくれた郷土を誇りに思い、郷土の発展に役立とうとする思い〕・自己―②〔＝自分という存在を無二の使命を持つ者と考え、自重自愛のかたわら研鑽に励む心情〕」⇩【造語成分】 **―の けっしょう**①-⓪【―の結晶】（愛し合う）夫婦の間に生まれた子供。 **―の す**①-①【―の巣】愛し合っている男女が、二人だけの生活を営む家。 **―の むち**①-①【―の〈鞭】愛するがために涙をこらえてとるきびしい態度や処置。

あい⓪①【《間】㊀〔雅：西日本方言〕あいだ。㊁「間狂言・間服」の略。

あい①【藍】㊀畑に栽培する一年草。葉を発酵させて、青色の染料をとった。〔現在の藍色の染料は、ほとんどが人工合成〕〔タデ科〕㊁〔←藍色⓪〕濃く深い青色。

あいあい⓪【〈藹〈藹】―たる ―と 〔その場の人びとの気持が〕一様にうちとけた様子。「和気―」

あいあい がさ⑤【相合傘】一本の傘を（相愛の）男女が一緒に差すこと。表記「相相傘」とも書く。

アイアン①〔iron＝鉄〕〔ゴルフで〕ボールを打つ部分を鉄で作ったクラブ。↔ウッド かぞえ方 一本

あいいく⓪【愛育】―する（他サ）愛情を持って子供を育てること。

あいいれない①-⓪【相《容れない】両立しない。「豊かさと簡便は―概念だ／―〔＝敵対関係にあったり 対立感情が優先したりして、協調出来ない〕仲」

あいいん⓪【愛飲】―する（他サ）〔その酒・牛乳・ジュースなどを〕日ごろから好んで飲むこと。「―者③」

あいいん⓪【合印】書類を照らし合わせたしるしに押す印。「合判・あいじるし」とも。

あいうち⓪【相打ち】〔剣道などの試合で〕向こうが打つと同時に、こちらも打つこと。表記「相撃・相討」とも書く。

あいうつ①-①【相〈搏つ】（自五）力を尽くして戦う。「いよいよ両雄―時がまいりました」表記「相打つ」とも書く。

アイエス オー⑤【ISO】〔←International Organization for Standardization〕国際標準化機構〔＝工業・農業関係などの規格の標準化を目的とする国際機関、また、そこで定めた規格〕。「イソ・アイソ①」とも。

アイエスディー エヌ⑦【ISDN】〔←integrated services digital network＝サービスを統合したデジタル通信網〕電話・データ通信・ファクシミリなど、従来別別であった各種の回線を統合して運用する、デジタル方式の通信網。

アイエスビー エヌ⑦【ISBN】〔←International Standard Book Number〕国際標準図書番号。書籍の流通業務合理化のため、図書につける国際的な番号。出版国・出版社・書名を示す数字からなる。

アイエッチ ちょうりき⑧【IH調理器】〔←induction heating〕電磁誘導による加熱を利用した調理器。

アイエム エフ⑤【IMF】〔←International Monetary Fund〕国際通貨基金⑧⑨。国際為替の安定や平価切下げ競争の防止などのために設けた国際機関。

アイエル オー⑤【ILO】〔←International Labor Organization〕国際労働機関⑨⑩。各国の労働条件の改善を目的とする、国連の専門機関。

あいえんか⓪【愛煙家】たばこが好きな人。

あいえん きえん⑤【合縁奇縁】環境・性格の違う者同士が、ふとした事から親しくなり、あるいは夫婦となり親友となって一生変わらないこと。表記「合縁」は「相縁・愛縁」とも、「奇縁」は「機縁」とも書く。

あいおい⓪【相生（い）】㊀同じ根から生え出（ているように見え）ること。「―の松」㊁〔「相老」に通じて〕夫婦が一緒に長生きすること。

アイオー シー⑤【IOC】〔←International Olympic Committee〕国際オリンピック委員会⑫。

あいか①【哀歌】悲しみの気持を述べた歌。

あいかぎ⓪【合鍵】本来の鍵とは別にその錠に合わせて作った鍵。かぞえ方 一本

あいかた⓪【相方】㊀Ⓐ漫才をする相棒。〔一方を「突っこみ⓪」、一方を「ぼけ②」という〕Ⓑ〔くるわで〕遊興の相手の遊女など。㊁Ⓐ〔歌舞伎で〕芝居のせりふの間に入れる三味線。Ⓑ能の謡の囃子方。表記 ㊁は「合方」とも書く。また、㊀Ⓑは多く、「〈敵〈娼」と書く。

あいがも⓪【《間《鴨】カモとアヒルとの雑種。食用。「―農法⑤」表記「合〈鴨」とも書く。かぞえ方 一羽

あいかわらず⓪【相変（わ）らず】（副）予測される（目立った）変化が認められず、今までと同じような状態が続いている様子。〔強調形は「あいも△変わらず（変わらぬ）」〕

「―忙しそうだね／七十歳を過ぎても―元気だ／―の〔＝変わりばえのしない〕毎日です」運用 (1)相手のことに用いる場合には、多くからかい・皮肉がこめられる。(2)手紙などで自分のことについて用いる丁寧表現は「相変わりませず」。例、「本年も相変わりませずご厚誼のほど願い上げます」

あいかん⓪【哀感】悲しみの感じ。物悲しい感じ。

あいかん⓪【哀歓】「悲しみと喜び」の意の漢語的表現。「―を共にする／人生の―」

あいがん⓪【哀願】―する（他サ）泣かんばかりに窮状などを訴えて、何かを頼むこと。

あいがん⓪【愛玩・愛〈翫】―する（他サ）身近に置いて大切に取り扱い、慰みとすること。「―〔＝ペットとして飼う〕動物⑤」

あいき① ㊀【愛機】その人の使いなれた飛行機・写真機など。㊁【愛器】その人の使いなれた楽器。

あいぎ③【《間着】あいふく。表記「合着」とも書く。かぞえ方 一着

あいきどう③【合気道】攻撃を加えて来る相手の動きを察知し、事前に徒手でそれを押さえる護身術。当て身技・関節技〔＝相手の肘の関節を攻める技〕などが有る。「合気術③」とも。

あいきゃく⓪【相客】㊀同じテーブルで飲食することになった、見知らぬ者同士の客。〔狭義では、茶会での正客以外の客を指す〕⇩相席 ㊁同室に△泊まり（居）合わせる他人。

アイキュー③【IQ】〔←intelligence quotient〕知能指数。

あいきょう⓪【愛郷】自分の生まれた土地を誇りに思い、その良さが失われないようにと願うこと。「―心③」

あいきょう③【愛〈嬌】・【愛《敬】㊀接する人に好感を与え、思わず話しかけたくなるような親しみを誘う物腰。「―をふりまく／―たっぷり」㊁〔多く「ご―」の形で〕客や同席者を喜ばせ楽しませるサービス。「ご―（まで）に手品を一番お見せします」運用 ㊁は、人前で失敗した場合の照れ隠しとして「今のはほんのご愛嬌だ」などとも用いられる。

―もの⓪【―者】接する人の心を和ませる何かを持っている人。「クラスの―／リスは森の―だ」

あいきょうげん③【《間狂言】一曲の能の中で、狂言方の役者が演じる△役柄（演技）の総称。

あいぎん⓪【愛吟】―する（他サ）好きな詩や歌（をうたうこと）。

あいくち⓪【合口】㊀つばの無い短刀。㊁話などがよくあう△こと（間柄）。「―がいい仲間／―が悪い〔＝苦手とする〕相手」表記 ㊀は、「〈匕首」とも書く。かぞえ方 ㊀は一口・一本

あいくるしい⑤【愛くるしい】（形）〔「くるしい」は、強意の接辞〕子供や仔犬・仔猫などの表情やちょっとしたしぐさが、いかにもあどけなくてかわいらしく感じられる様子だ。「―笑い顔」派 **―さ**⑤④ **―げ**⑤⑥⓪

あいけい⓪【愛敬】―する（他サ）「敬愛」の意のやや古風な表現。「―の念を増す」

あいけん⓪【愛犬】犬の性情をよく知り、かわいがること。また、そのかわいがっている（飼い）犬。「―家⓪」

あいこ①【愛顧】〔「顧」は、目をかける意〕△上の（強い）立場にある人が、特定の部下や商人・芸人などに好意を持ち、その者が有利になるように計らうこと。〔普通、好意を受ける側が用いる〕「永年御―をいただきまして」

あいこ③⓪【相子】〔「こ」は「事」の意。「子」は借字〕どちらも優劣の無いこと。勝負無し。「これで―だ」

あいご①【愛護】―する（他サ）△いじめないで（よさを損なわずに）保護すること。「国語の―／動物―⑤」

あいご⓪【相碁】〔碁で〕腕前に優劣が無いこと。

あいこう⓪【愛好】―する（他サ）好ましいものとして、その物事を積極的に受け入れること。「平和を―する／音楽―家・切手―者⑥」

あいこうしん③【愛校〈心】自分の△出た（在学する）学校の名を傷つけないように気をつけ、声価を高めるように努力する気持。

あいこく⓪【愛国】自分の生まれた国を誇りに思い、国のためを思って行動すること。「―者④③・―心④③」

あいことなる①-③【相異（な）る】（自五）二つ（以上）の物事の間に、違いが認められる。「―二点間の距離／主義・主張の―二大政党／それぞれ―分野」

あいことば③【合（い）言葉】㊀〔夜襲・乱戦の時などに〕味方だということを知らせるために使う合図の言葉。㊁同志の結束を固め、仲間の主義・主張を自他に確認させるためのモットー。「都政刷新を―にする」

アイコン①〔icon＝肖像〕〔コンピューターで〕操作の対象であるファイル・ディスク・プログラムなどを、小さな絵で画面上に表示したもの。マウスを用いてこれを選択した後、操作内容をコンピューターに指示する。

アイ コンタクト③〔eye contact〕言葉によらず意思を伝えるために、視線を合わせること。

あいさい⓪【愛妻】妻をかけがえのない伴侶として、末永く連れ添えることを願うこと。また、その妻。「―家⓪・―弁当⑤」

＊＊**あいさつ**①【挨拶】―する（自サ）〔「挨」は推す、「拶」は迫る意。もと、禅問答におけるやりとりを指した〕㊀〈だれ ニ ―する〉人と会った時や別れる時に、社交的・儀礼的な（動作を伴った）言葉を交わすこと。また、その言葉。「―を交わす／毎朝おはようときちんと―する／初対面の―／時候の―／そう言われて―〔＝返答〕に困った／―語⓪」㊁その場に居る人に対して、来訪の趣旨や開会・閉会を伝えたり儀礼として祝意や謝意を表わしたりする△こと（言葉）。「新任の―を△する（述べる）／何の―〔＝断り〕も無しに入り込む／―回り⑤」運用「（これは）ご挨拶だね」の形で、「なんというあきれた物の言いようだ」と相手の失礼な応対を非難する気持で皮肉をこめて用いられる。

あいし①【哀史】△悲運（逆境）にしいたげられた人（びと）の一生や一族の滅亡などに関する、涙を誘う物語。「平家滅亡の―／女工―④」

あいじ①【愛児】かわいい（自分の）子供。

あい

【哀】㊀かなしむ。かなしい。かなしみ。「哀調・悲哀」㊁あわれむ。「哀憐・哀恤」㊂あわれっぽく。「哀願・哀訴」

【〈埃】㊀細かい土。ちり。ほこり。「塵埃」㊁（略）エジプト（埃及）。

【挨】おす。せまる。「挨拶」

【愛】㊀かけがえの無いものとして、大事に扱う。「愛児・愛妻・愛犬・愛車・溺愛・自愛」㊁有用のものとして、手放すまいとする。「愛惜・割愛」㊂自分の好みに合ったものとして、深い興味を持つ。「愛好・愛読」⇩（本文）あい【愛】

【〈隘】せまい。せばまった地勢で、通りにくい。「隘路・狭隘」

【曖】薄暗い。ぼんやりしている。「曖昧・曖昧模糊」

アイシー③【IC】㊀〔←integrated circuit〕集積回路。「―カード⑤」㊁〔←interchange〕インターチェンジ。 **―タグ**⑤〔IC tag〕記憶装置と無線通信の機能をもつタグ(付け札)。在庫管理や盗難防止などの目的で用いる。 **―チップ**⑤〔IC tip〕クレジット カードなどに埋め込まれているIC。 **―レコーダー**⑥〔IC recorder〕内蔵もしくは外付けのフラッシュ メモリーを媒体とし、音声を録音・再生する装置。

アイシービーエム⑦【ICBM】〔←intercontinental ballistic missile〕大陸間弾道弾。射程が約一万キロの、超長距離用戦略ミサイル。[かぞえ方] 一基:一発

アイシーユー⑤【ICU】〔←intensive care unit〕集中治療室。重態の患者や手術後の患者を収容し、心電計など種種の計器を使って、病状を常時看視し、不意の悪化状態に備える病室。「強化看護室⑥」とも。

アイシェード③〔eyeshade〕光線をよけるために使う、目庇(マビサシ)。多く、プラスチック製。

あいしゃ⓪【愛車】日ごろ自分が運転している車(を大事にすること)。「―を駆って」[かぞえ方] 車は一台

あいじゃく⓪(ヂャク)【愛着】―する(自サ)「あいちゃく」の古風な表現。

アイシャドー③〔eye shadow〕まぶたに塗る、青・灰色などの化粧品。「アイシャード③」とも。「どぎつい―」

あいしゅう⓪(シウ)【哀愁】せつない別れなどによっていだく、悲しみの感情。「―に満ちた歌声」

あいしゅう⓪(シフ)【愛執】愛情を断ち切れないこと。

あいじゅつ⓪【哀︿恤】―する(他サ)弱い立場にある者などに、思いやりの気持をいだいて接すること。「貧民を―する」

あいしょ①【愛書】㊀本(を集めること)が好きなこと。「―家⓪」㊁愛読書。

あいしょう⓪(シャウ)【哀傷】―する(他サ)〔詩や歌の形で〕人の死を悲しむこと。「―歌③」

あいしょう⓪(シャウ)【愛称】㊀親しい間柄同士で言う、△姓(名前)の、一種の略称。例、山本△さん(君)→山さん・山ちゃん・山。㊁〔正式の列車番号以外に〕個個の特急列車などにつける、親しみやすい名称。例、のぞみ・ひかり・とき。㊂あだな。例、女の子につける「ちゃこ」など。

あいしょう⓪(シャウ)―する(他サ)㊀【愛唱】好きで、折にふれて歌うこと。「―歌③」㊁【愛︿誦】好きで、折につけて声に出して言ってみること。「―する古典」

あいしょう③(アヒシャウ)【相性】〔陰陽(インヨウ)五行説などから見て〕男女などの性格がうまく合っていること。「…とは―が良い/日本酒と―のいいつまみ」[表記]「合性」とも書く。

***あいじょう**⓪(ジャウ)【愛情】〔夫婦・親子・恋人などが〕相手を自分にとってかけがえの無い存在としていとおしく思い、また相手からもそのように思われたいと願う、本能的な心情。〔広義では、生有るものを大切にかわいがる気持も含む〕

あいじょう⓪(ジャウ)【愛嬢】その人のかわいい娘。

あいじるし③(アヒ)【合印】㊀味方だということを知らせるための目印。㊁二枚の布を正しく縫い合わせるためにつける印。㊂あいいん。[表記]㊁は、「合《標」とも書く。

あいじん⓪【愛人】㊀愛する人。㊁「情婦・情夫」の婉曲(エンキョク)な表現。

アイス〔ice=氷〕㊀(造語)氷などで冷たくしたものであることを表わす。「―コーヒー⑥④・―ウオーター⑤」㊁①アイスクリームの略。「あずき―④・―もなか④」〔明治時代、俗に「氷菓子」と同音なので、高利貸(シ)の意にも用いられた〕

***あいず**①(アヒヅ)【合図】―する(自他サ)〈だれニ(なにヲ)―する〉当事者同士の約束として決めた伝達・確認の方法(によって知らせること)。〔目・手まね・信号・楽器・のろしなどを使う〕「―を送る」

アイスキャンデー④〔和製英語 ←ice＋candy〕甘みをつけた水を棒状に堅く凍らせた菓子。略して「キャンデー」とも。[かぞえ方] 一本

アイスクリーム⑤〔ice cream〕牛乳に砂糖・卵の黄身などを交ぜ合わせて凍らせた食品。〔牛乳の脂肪分八パーセント以上のものと定められている〕

アイススケート⑤〔ice skate〕氷上でするスケート。

アイスダンス④〔ice dance〕フィギュア スケート競技の一種目。男女が対になって氷上を音楽に合わせて踊るように滑るもの。

アイスバーン④〔ド Eisbahn〕雪の表面が固まって氷のようになった状態(の山の斜面やスキー場)。

アイスピック④〔ice pick〕氷の塊を細かく砕くのに用いる、握りの太い錐(キリ)。

アイスペール④〔ice pail=手おけ〕砕いた氷を入れておけ状の卓上容器。

あいすべき④【愛すべき】(連体)㊀かわいらしい。「―少女」㊁見どころが有り、出来るなら自分がめんどうを見てやりたい気持だ。「―青年」

アイスボックス④〔icebox〕氷を使う(手軽な)冷蔵庫。

アイスホッケー④〔ice hockey〕アイスリンクでスケートをはいてするホッケー。

あいすまぬ①-②、④(アヒ)【相済まぬ】㊀許しがたいことで、そのままにしておけない。「そんなことでは―」㊁申しわけない。「どうも―ことをいたしました」

アイスリンク④〔ice rink〕スケートが出来る、氷が張った場所。「スケートリンク」とも。[かぞえ方] 一面

***あい・する**③【愛する】(他サ)〈だれ・なにヲ―〉㊀(異性に対して)愛情をいだく。「―人のために/動物を―(=かわいがる)」㊁好きで、いつもそれに親しむ。「詩を―」㊂かけがえの無いものと思って、大切にする。愛す①(五)。「真理を―」

あいせき⓪【哀惜】―する(他サ)〔人の死などを〕惜しみ悲しむこと。「―の念に堪えない」

あいせき⓪【愛惜】―する(他サ)△失い(別れ)たくないという気持を強くいだくこと。

あいせき⓪(アヒ)【相席】―する(自サ)他の客と同じテーブルにつくこと。「―でお願いします」[表記]「合席」とも書く。

あいせつ⓪【哀切】―に ―な 非常にあわれで、身につまされる様子。「―な物語/―な調べ」[派]―さ⓪

あいせっ・する①-⓪(アヒ)【相接する】(自他サ)ほかのものを間に置かないで、直接に隣り合う。「領土(を)―両国」

あいせん⓪(アヒ)【相先】〔碁や将棋などで〕交互に先番(センバン)となって勝敗を競うこと。互先(タガイセン)。

アイゼン①〔ド Eisen=鉄〕登山靴の底に着用する、滑り止めの鉄製のつめ。[かぞえ方] 一枚

あいぜん⓪【愛染】愛欲の煩悩から逃れられないこと。 **―みょうおう**⑦⑤(ミヤウワウ)【―明王】〔真言宗で〕三つの目・六本の手を持ち、常に怒りの相を表わす、愛欲の神。もと仏法守護の神。近世では恋愛の神・遊女の守り神としても信仰された。[かぞえ方] 一体(タイ)

あいそ①【哀訴】―する(他サ)「哀願」の強調表現。

あいそ③【愛想】〔「あいそう」の短呼〕㊀客に心からサービスしようとする、応対の仕方や顔つき。「―がいい/―を振りまく/何のお―もございませんで(=おかまいも出来ませんで)」㊁好意を持って、相手になってやる気持。「―が尽きる(=余りのばからしさにあきれて相手をするのがすっかりいやになる)/―もこそも尽きる(=『あいそが尽きる』の強調表現)/サラリーマン稼業に―を尽かす(=…を続ける気持が無くなる)」㊂⇩おあいそ **―づかし**④【―尽かし】相手をするのがい

やになって、とりあわないこと。 **―わらい**④(ワラヒ)【―笑(い)】相手に取り入るための笑い。

あいそう③(サウ)【愛想】⇩あいそ

あいぞう⓪【愛憎】特定の個人にいだく愛情とそれに反する憎しみの気持。

あいぞう⓪(ザウ)【愛蔵】―する(他サ)愛着をいだき、大切に保存すること。「―版(バン)」

あいそく⓪【愛息】かわいがっているむすこ。

アイソトープ④〔isotope=同じ位置〕原子番号が同じで、原子量の違う元素。訳語は、同位元素。「イソトープ③」。

****あいだ**⓪(アヒダ)【間】〔「だ」は接辞か〕㊀Ⓐ直接続かない二つの△点(物)の非連続部分に存在する空間・時間など。「木立の―(=すきま)から空がのぞく/―(=絶え間)を置いて痛む」Ⓑ問題や関係などの有る双方に属さないもの。あい。「―(=中間)を取る/―に入って(=仲裁者として)丸く収める/―に立つ(=仲介する)」㊁Ⓐ一続きの時間・空間。「休みの―も研究を続ける/私が生きている―(=限り)はそんな事はしないでほしい/昔尾張(ワリ)・美濃(ミノ)の―(=地方一帯)を流浪していたころ」Ⓑ仲間うちとしての人間関係。「夫婦の―には三人の子がある/遠慮の無い―(=仲)/われわれの―(=仲間同士)の問題/生徒の―(=大多数)に人気が有る/数学者の―(=社会)では常識となっている」 **―がら**⓪【―柄】㊀血族・親類などの関係。「親子の―」㊁〔交際などで生じる〕人間関係。「麗しい師弟の―」 **―ぐい**⓪(グヒ)【―食(い)】「かんしょく」の和語的表現。

アイターン③【Iターン】―する(自サ)〔和製英語 ←I＋turn〕もともと都市部に住んでいた人が、地方に移住し定職に就くこと。⇩ユーターン

あいたい⓪(アヒ)【相対】余人を交えず、一対一の関係で何かをすること。「―死(ニジ)⓪(=江戸時代、情死の称)/―ずく⓪(=当事者同士の話合いで何かを取り決めること。また、その結果)」

あいたい・する①-③(アヒ)【相対する】(自サ)両者が△向かい合う(対立する)。

あいたしゅぎ④【愛他主義】利他主義。

あいたずさ・える①-④(アヒタヅサヘル)【相携える】(自下一)何かを強力に進めるために、関係者が協力する。

あいちゃく⓪【愛着】―する(自サ)〔「あいぢゃく」の変化〕今まで慣れ親しんだものを捨て去りがたく思う心。「古い町名に―を感じる/―を覚える」

あいちょう⓪(テウ)【哀調】物悲しい調子。「―を帯びた歌声」

あいちょう⓪(テウ)【愛鳥】㊀野鳥を大切に保護しようとすること(気持)。「―週間⑤(=五月十日からの一週間)」㊁その人が大事に飼っている小鳥。

あいつ⓪(代)〔「彼奴(ヤツ)⓪②」の変化〕「あの人・あれ」の意の、ぞんざいな言い方。〔憎悪・侮蔑(ブベツ)などの気持を込めた場合にも、親しみの気持を込めた場合にも使われる〕「今度ばかりは―にいいようにしてやられた/―(=ⓐあの人。ⓑあの事)が気になる」⇩そいつ・こいつ・どいつ:こそあど

あいつ・ぐ①、①-⓪(アヒ)(自五)㊀【相次ぐ】同じような好ましくないことが引き続いて起こる。「△抗議(故障)が―/強豪相次いで敗れる」㊁【相継ぐ】「引き継ぐ」の改まった表現。

あいづち⓪③④(アヒ)【相︿槌】〔刀を鍛える時などに、打ち合わせる槌の意〕「―を打つ(=人の話に調子を合わせたりうなずいたりする)」

****あいて**③(アヒ)【相手】㊀自分と△一緒(組)になって何かをする人。「結婚の―/ダンスの―をする/相談―⑤・遊び―④」㊁自分と相対して争う人。「―にしない(=とりあわない)/―にされない/―の立場を尊重する/―が悪い/けんか―」 **―かた**⓪【―方】△事件に関係する(行為を向ける)、相手の人。 **―こく**③【―国】貿易や外交の対象としての外国。 **―ど・る**④【―取る】(他五)その人や組織などを相手と△する(して争う)。〔狭義では、訴訟の相手として訴えることを指す。例、「△国(県)を―」〕

***アイデア**③〔idea=考え・理念・観念〕何かを実現するための方法や手段として、こうしたらよいのではと思い巡らせた考え。アイディア。「いい―(=思いつき)だ/―マン④」

アイティー③【IT】〔←information technology=情報技術〕コンピューターを用いて情報を処理したり他のコンピューターと通信したりする技術。「―産業⑤」

アイディーカード⑤〔ID card〕〔ID=identity, identification の略〕身分証明書。

あいでし⓪(アヒ)【相弟子】同じ師匠・先生に就いて、一緒に△学ぶ(学んだことの有る)弟子。〔狭義では、同格の弟子を指す〕⇩同門

アイテム①〔item=(個個の)項目〕〔衣料品などの〕個個の品目。「ファッション―⑤」

あいてら・す①-②(アヒ)【相照(ら)す】(他五)⇩肝胆(カンタン)

アイデンティティー③〔identity=自己同一性〕自分という存在の独自性についての自覚。

あいとう⓪(タウ)【哀悼】―する(他サ)人の死を心から悲しんだり惜しんだりすること。「―の意を△表する(ささげる)」

あいどく⓪【愛読】―する(他サ)〔その書物や新聞などを〕好きで△よく(いつも)読むこと。「―者④③・―書⑤⓪③」

あいともな・う①-③(アヒトモナフ)【相伴(な)う】(自五)㊀だれかを一緒に連れる。㊁両立しがたいものが共に備わる。「名実―」

アイドリング①⓪―する(他サ)〔idling〕△機械を作動させ(エンジンを低速で回転し)て、動力を伝えること無く、空回りさせること。 **―ストップ**⑧〔和製英語 ←idling＋stop〕〔自動車で〕二酸化炭素排出の削減などのために、駐停車の間エンジンを完全に停止させること。

アイドル①〔idol=偶像〕限り無き△崇拝(憧(アコ)がれ・寵愛(チヨウアイ))の対象となるもの。「―歌手」

あいなかば・する①-②、①-③(アヒ)【相半(ば)する】(自サ)〔対照的な関係にある物事の度合が〕ほぼ同じである。「△功罪(収支)―」

あいなめ⓪からだは細長く、緑を帯びた茶色の近海魚。長さは三〇センチくらいで、食用。「あぶらめ」とも。〔アイナメ科〕[かぞえ方] 一尾・一匹

あいな・る①-①(アヒ)【相成る】(自五)「成る」の改まった言い方。「お世話に相成りました」

あいなるべくは①-③、①-④、⑤(アヒ)【相成るべくは】「出来ることなら」の改まった言い方。

***あいにく**⓪【《生憎】(副)―の ―な〔「あやにく⓪③」の変化〕肝腎(カンジン)なところで物事の進行・成就を妨げるような事態が起こってしまう様子。「―な(=都合の悪い)事に みな留守だった/―(と)病気で行かれない/お―さまですがただ今品切れです」[運用]「おあいにくさま」の形で、相手の期待がはずれたことを皮肉るのにも用いられる。例、「おあいにくさま、そうは、思い通りにはなりませんよ」

アイヌ①〔アイヌ Ainu=人間〕東北地方以北を中心に居住した、日本列島の先住民族。現在は、おもに北海道に住む。〔昔、「えみし」「えぞ」と呼ばれたのは、このアイヌ民族を指すという〕「―コタン④(=アイヌ村)」

あいのこ⓪(アヒ)【《間の子】〔雑種の意〕㊀「混血児」の俗称。〔侮蔑(ブベツ)の意を含意することもある〕㊁異なる種との交配によって生じた動物。「イノブタはイノシシとブタの―だ」

㊂種類・性質の異なる二つの物を組み合わせて一体化させたもの。「―弁当[5]〔=明治末から大正期に、米飯にフライ・カツなどを添えた弁当〕」 表記「合の子」とも書く。

あいのて[3]【合の手】㊀〔邦楽で〕唄(ウタ)と唄との間に入れる、三味線だけの短い演奏。㊁歌や踊りの間に△入れる(△入る)掛け声や手拍子。㊂当事者間の会話などに横から△入れる(△入る)賛同を示す言葉。「―を入れる」 表記「《間の手」とも書く。

あいのり[0]【相乗(り)】―する(自サ) ㊀〔見知らぬ者同士が〕同じタクシーなどに乗ること。㊁共同でチャンスを利用すること。「―番組[5]〔=複数のスポンサーによる番組〕」

あいば[1]【愛馬】㊀馬をかわいがること。「―精神[4]」 ㊁自分がいつも乗る、大切にしている馬。

あいはん[0]【合判】㊀合印。㊁連帯して責任を持つしるしに押す印。

あいばん[0]【相判】普通のノートの大きさで、週刊誌より一回り小さいサイズの、紙の寸法。縦約二一センチ、横約一五センチ。〔写真乾板では、縦一三センチ弱、横一〇センチ強のものを指す〕 表記「《間判・合判」とも書く。

アイバンク[3]〔eye bank=目の銀行〕死後、自分の角膜を移植希望者に提供する制度。また、角膜の提供者の登録、移植の仲介などを行なう機関。

あいはん・する[1]-[3]、[1]-[1]【相反する】(自サ) 比較する両者の間に、対照的な関係が認められる。相反す[1]-[1](五)。「利害の―国家」

アイビー[1][3]〔ivy〕観葉植物の一つ。ツタの栽培種で、常緑。〔ウコギ科〕 かぞえ方 一株・一本 **―リーグ**[5]〔Ivy League〕米国東部の八つの名門私立大学。また、そのスポーツリーグの名。 **―ルック**[5]〔和製英語 ←ivy + look〕アイビーリーグに属する大学生に流行した服装。

アイピー[3]【IP】〔←internet protocol〕コンピューターネットワークにおける、通信規約(プロトコル)の一つ。ネットワークに接続する個個のコンピューターにアドレスを割り振り、データ転送における伝送経路の確定方法を定めている。 **―アドレス**[5][7]〔IP address〕インターネットでデータを送受信する際、発信元と宛先を特定するのに用いられる番号。 **―でんわ**[5]【―電話】インターネットを利用した電話。音声を圧縮したデジタル信号に変え、ブロードバンド回線を通してやりとりするもの。

アイピーエス さいぼう[7]【iPS細胞】〔←induced pluripotent stem cells〕人工的に合成した細胞。受精卵や胚ではなく、体細胞に遺伝子を導入し、生体の様ざまな組織に分化する能力を持たせたもの。「誘導多能性幹細胞・人工多能性幹細胞」とも。

あいびき[0]【合〈挽(き)】牛肉と豚肉を、交ぜてひいたもの。

あいびき[0]【〈逢(い)引(き)】―する(自サ) 恋し合う男女が人目を忍んで会うこと。 表記「〈媾曳〉」とも書く。

あいひとし・い[1]-[3]【相等しい】(形) 双方を比べたとき、長さ・形・大きさなどが互いに全く同じだ。

あいびょう[0]【愛猫】(ペットとして)かわいがっている猫。また、猫の性情を理解し、かわいがること。「―家(カ)」

あいふ[0]【合(い)符】昔、駅で手荷物を預かったしるしに渡した札。 かぞえ方 一枚

あいぶ[1]【愛〈撫】―する(他サ) ㊀常に自分のそばに置いてかわいがること。㊁愛情の表現として、なでたりさすったりすること。

あいふく[0]【《間服】春・秋に着る洋服。あいぎ。⇩冬服・夏服 表記「合服」とも書く。 かぞえ方 一着

あいふだ[0]【合(い)札】品物を預かったしるしに渡す△札(半券)。〔もとは、割符(ワリフ)を使った〕 かぞえ方 一枚

あいべつりく[5]【愛別離苦】〔仏教で〕八苦の一つ。愛する人と別れわかれになる苦しみ。 表記 俗に、「哀別離苦」とも書く。

あいべや[0]【相《部屋】〔宿屋などで〕見知らぬ者同士が同じ部屋に寝泊まりすること。 表記 ⇩付表「部屋」

あいぼ[1]【愛慕】―する(他サ) 特定の相手に対して深く心を寄せ、できることならいつもそば近くにいたいと思うこと。

あいぼう[0][3]【相棒】〔「駕籠(カゴ)を一緒にかつぐ相手」の意から〕上下の意識なく一緒に仕事をする仲間。

あいぼし[0]【相星】〔すもうで〕対戦する両者の、その場所での勝敗の数が全く同じである状態。「五勝三敗の―」

アイボリー[1]〔ivory=象牙(ゾウゲ)〕象牙色(の厚い西洋紙)。

あいま[3][0]【合間】次の事が△行なわれる(起こる)までの、短い時間。「仕事の―/梅雨(ツユ)の―」

***あいまい**[0]【曖昧】―に・―な 〔「曖」も「昧」も暗い意〕㊀言動や態度などに不明確な点があり、的確に判断しがたい様子だ。〔自分の有利な立場を失いたくない、また、責任を取らされることを避けたいなどの理由で意図的に自分の意志を明確に表示しないことを表わす場合に言うこともある〕「―な表現/思惑があって―な態度を取る/―に返事をしておいた/―模糊(モコ)[5]」⇔明確・明瞭(リョウ) ㊁隣接するものとの境界に明確さを欠く様子だ。「記憶が―だ/―な判定規準」 ㊂〔明治・大正期の用語〕風紀上、いかがわしい点が認められる状態。「―屋[0]・―宿(ヤド)[5]」 派 ―さ[0]

あいま・つ[1]-[1]【相〈俟つ】(自五)〔「俟つ」は期待する意〕二つ以上の事が重なって働く。「両両相俟って〔=二つの要素が重なって、プラスと成り〕」

あいみたがい[1]-[0]【相身互(い)】同じ困った境遇にある人同士が互いに同情し、助け合うこと。「武士は―」 表記 俗に、「相見互い」とも書く。

あい・みる[1]-[1]【相見る】(自上一)「会見する・見合う」の改まった表現。「―両雄」

アイモ[1]〔Eyemo=商標名〕手さげの三五ミリ撮影機。ニュース映画用。 かぞえ方 一台

あいもかわらぬ[1]-[0]、[1]-[4]【相も変(わ)らぬ】相変わらず以前と同じままの(好ましくない)状態である。「―愚痴の繰返し」

あいもち[0]【相持(ち)】㊀△代わりあって(一緒に)荷物などを持つこと。㊁(費用などを)等分に負担すること。

あいやど[0]【相宿】〔見知らぬ者同士が〕同じ△宿(部屋)に泊まり合わせること。

あいよう[0]【愛用】―する(他サ)(強い愛着があって)いつもそれを使うこと。「―者[3]・―品[0]・―車[3]」

あいよく[0]【愛欲・愛〈慾】異性に対する強い性愛の欲望。〔道徳的見地からの表現〕

あいよめ[0]【相嫁】兄弟の妻(が互いに相手を呼ぶ称)。

アイライン[3]〔eye-line〕(女性が)目を大きく見せるために、目のまわりをふちどった線。

あいらく[0][1]【哀楽】悲しみと楽しみ。「喜怒―」

あいらし・い[4]【愛らしい】(形)〔幼児や小さな動物の表情やちょっとしたしぐさ、可憐な草花などを見て〕いかにもかわいらしいという印象を受ける様子だ。「―花」 派 ―さ[3]

アイリス[1]〔iris〕西洋種のアヤメ。花弁が少し細く、色彩に富む。生け花などによく使われる。〔アヤメ科〕 かぞえ方 一株・一本

あいれん[0]【哀〈憐】「あわれみ」の意の漢語的表現。「―の情」

あいれん[0]【愛〈憐】弱い立場の者に思いやりの気持をい

だき、できるかぎりのことをしてやろうと思うこと。

あいろ[0]【《文色】〔雅〕〔「あやいろ」の変化〕模様。「物の―〔=区別〕も見え分かず〔=分からない〕」

あいろ[1]【〈隘路】㊀狭(くて、けわし)い道。㊁物事を順調に進める上で障害となることがら。「販売の―/―を切り開く」

アイロニー[1]〔irony〕〔文芸用語で〕表現技法として用いる、事実に反する言い方。〔狭義では、皮肉・あてこすりなどを指す〕「イロニー」とも。⇩反語

アイロニカル[3]―な〔ironical〕「皮肉㊀㊁」を含んだ。

アイロン[0]〔iron=鉄〕㊀衣服や布のしわを伸ばしたり折り目をつけたりするために、加熱して用いるスチール製品。〔普通は、電気アイロンを指す〕「ズボンに―をかける/スチーム―[5]」 ㊁髪の毛の癖を直したり 形を整えたりするために使うこて(をかけること)。 かぞえ方 ㊀は一台

あいわ[0][1]【哀話】あわれな(身の上)話。

****あ・う**【合う】■一[1](自五) ㊀〈なに・だれト―〉接近して一体化したり 両者の間に食い違いが認められなかったりする。「どこまで行っても―ことの無い二つの線/帳尻(ジリ)が―/二人の証言は合っている/つじつまが―/△ぴたりと(阿吽(アウン)の)呼吸が―/△意見(そり)が合わない/△話(性(ショウ)・馬)が―/落ち―」 ㊁〈なにニ―〉基準と比べて見て、矛盾・不一致・不都合が無い状態だ。「△趣味(体質)に―/△基準(実情・実態)に合わない/時計が合っていない〔=正しくない〕/今度の靴はよく足に―〔=ぴったりで、具合の悪い所が少しも無い〕/ピントが―/間(マ)に―〔=⇩間に合う〕」 ㊂〈なにニ―〉二つの物を組み合わせてみて、違和感が無く見られる様子だ。「服に―ネクタイ/壁紙によく―カーテン」 ㊃〈なにニ―〉それだけ△労力(元手)をかけても、ある程度の利益が見込まれる状態だ。「百円では合わない〔=損だ〕/採算が―/割に合わない」 ■二〔「動詞連用形 + ―」の形で、接尾語的に〕同じ動作を、向こうもしこちらもする。「愛し―[4]・ほめ―[3][0]・殴り―[4][0]」

****あ・う**[1]【会う】(自五) ㊀〈だれト―/だれニ―〉ある場所△を決めて(で偶然に)人と一緒になり、互いに相手を認めたり話をしたり などする。「いつもの場所で―」 ㊁〈なにニ―〉(偶然に)好ましくない事態を経験する。「△夕立(交通事故・こわい目・火災・伏兵・袋だたき・反対・抵抗)に―」 名 会い[0][1]「短い―の ひととき」 表記 ㊀は「〈逢う」、㊁は「《遇う・遭う」とも書く。

アウェー[2]〔away〕〔サッカーなどで〕相手チームの本拠地。「アウエー」とも。「―でのゲーム」

アウエー[3] ⇩アウェー

アウター[1]〔←outerwear〕⇔インナー ⇩アウトウェア

アウタルキー[3]〔ド Autarkie〕自給自足。

アウト〔out〕■一[1] ㊀〔テニスなどで〕ボールをその範囲内に打つように規定している境界線の外側。また、そこにボールが出ること。⇔イン ㊁〔野球で〕その回の打者・走者としての資格を失うこと。〔俗にアウツとも言い、広義では失格・失敗・だめの意にも用いられる〕⇔セーフ・フェア ㊂〔ゴルフで〕コースの前半。⇔イン ■二(造語) 外(ト)。「―ポケット[4][5]〔=上着の外側から布を当てて縫いつけたポケット〕」⇔イン

アウトウェア[4]〔和製英語 ←out + wear〕コート・セーター・カーディガンなどの(外出用の)上着類。「アウター」また「アウトウエア[5]」とも。

アウトカーブ[4]〔outcurve〕〔野球で〕打者の反対側へ(落ちながら)曲がる投球。⇔インカーブ

アウトコース[4]〔和製英語 ←out + course〕⇔インコース ㊀〔陸上競技やスケート競技で〕曲線になっているコースの外回りの走路。㊁〔野球で〕本塁上の、打者から遠い方を通る、投球の道筋。

アウトコーナー[4]〔和製英語 ←out + corner〕〔野球で〕外角。⇔インコーナー

アウトサイダー[4]〔outsider〕⇔インサイダー ㊀局外者。〔自分たちがその社会の主流だと思っている人からみて、仲間に入ろうとしない、また、入れたくない人〕 ㊁労働組合法の規定にはずれた組合。法外組合。㊂〔経済で〕協定に加入しないもの。非加盟△者(団体)。

アウトサイド[4]〔outside〕⇔インサイド ㊀外側。「―キック[7]」 ㊁〔テニスなどで〕打ち込む範囲を規定したラインの外側(にボールが落ちること)。

アウトシュート[4]〔outshoot〕〔野球で〕打者の反対側へ反るように曲がる投球。⇔インシュート

アウトソーシング[4]〔outsourcing〕外部委託。業務の一部や事務処理などを外部に発注すること。

アウトドア[4]〔outdoor〕建物の外。「―スポーツ」⇔インドア

アウトドロップ[5]〔out drop〕〔野球で〕打者の反対側へ急に曲がり落ちる投球。略して「アウドロ[0]」とも。⇔インドロップ

アウトバーン[4]〔ド Autobahn=自動車専用道路〕ドイツの高速道路。

アウトプット[4]〔output〕■一 ⇔インプット ㊀―する(他サ)〔コンピューターなど、電気製品の〕出力。㊁企業の売り出す資材。産出。■二 レコード プレーヤーや録音機を拡声器につなぐ装置。

アウトボード エンジン[7]〔outboard engine〕モーターボートなどのエンジンが、船体の外側に付いているもの。略して「アウト」とも。⇔インボード エンジン

アウトライン[4]〔outline=輪郭〕事柄の大体の内容。

アウトロー[4]〔outlaw〕無法(者(モノ))。

アウフヘーベン[4]―する(他サ)〔ド aufheben〕止揚。

あうん[0]【〈阿吽〉・〈阿呍〉】出す息と吸う息。「―の呼吸が合う〔=すもうの仕切りなどで、双方の立ち上がろうとする気合が一致する〕」

あえか[1]―なる〔雅〕かよわく、美しい。

あえ・ぐ[2]【〈喘ぐ】(自五) ㊀苦しそうに息を切らしながら呼吸する。「喘ぎ喘ぎ進む」 ㊁困難な状態にあって苦しむ。「△重荷(物価高・貧困・不振)に―」

あえず【《敢(え)ず】〔「動詞連用形 + (も) + ―」の形で、接尾語的に〕十分にはそうすることが出来ない(で)。「取るものも取り―/涙せき―〔=涙をこらえきれないで〕/言いも―〔=言い終わらないうちに〕」

あえて[1]【《敢(え)て】(副) 自分の置かれた立場や状況から見て、損失や危険を伴うことを承知の上で、成功した際の効果を期待して、思い切ってその事を実行する様子。「反対意見を押し切って、―決行した/―言わせてもらえば、君は辞任した方がいい/人権問題にかかわること故、―再考を求める/そんなぜいたくな物は―〔=無理してまでも〕食べたいとは思わない」

あえな・い[3][2]【《敢(え)無い】(形) 予測に反したもろい結末を迎える様子だ。「―最期を遂げる/敢え無くも敗れた」 文法 助動詞「そうだ(様態)」に続くときは「あえなさそうだ」の形になる。また「すぎる」と結びついて複合動詞をつくるときは「あえなさすぎる」の形になる。

あえもの[0][2][3]【《和(え)物】酢・みそなどで和えた食品。 表記「〈韲物」とも書く。

あ・える[2]【《和える】(他下一) 生の野菜・魚・貝などに、みそ・酢・ごま・豆腐などを交ぜ合わせて味をつける。 名

和え[2]「酢みそ―[0]」 表記 「〈韲える」とも書く。

あえん[0][1]【亜鉛】 ㊀金属元素の一つ〔記号 Zn 原子番号30〕。青白い色で、展性があって、トタン板・電極などに用いる。 ㊁トタン。「―ぶきの屋根」 **―か**[0]【―華】 亜鉛を酸化させて作る白い粉〔=酸化亜鉛[4]〕。顔料・医薬用。〔化学式 ZnO〕「―軟膏[5]」⇩チンク油

*__あお__【青】 ■一[1] ㊀よく澄んだ空の色に代表される色。〔濃い「青」は三原色の一つ。植物学では、花の色の二大区分として赤と対比させる〕「秋晴れの―一色の空/海の―に白いカモメ」 ㊁草木の新芽や若葉の明るい薄緑色。「―葉若葉・―物」 ㊂〔馬の〕つやの有る黒い毛色。また、その馬。⇩青馬・青毛 ■二（造語） 年が若くて、経験が不足していることを表わす。「―二才」

あおあお[3]【青青】（副）―と・―する まさに青一色であるという感じを与える様子。「―と茂った草」

あおあざ[0]【青〈痣】 皮膚の一部に出来る青(黒)いあざ。〔黒い色素の増殖や打身による内出血が原因〕「けんかばかりして―が絶えない〔=よくけがをする〕」⇩あかあざ

あおあらし[3]【青嵐】〔短歌・俳句などで〕初夏、青葉のころに吹く、さわやかな風。

__あお・い__[2]【青い】（形）↕赤い ㊀青の色が認められる状態だ。「―秋の空/―目〔=西洋人〕の見た日本」 ㊁顔色が青ざめた様子だ。「―顔をしている」 ㊂〔実などが〕まだ熟さない状態だ。「―ミカン」 派 ―さ[1] 表記 ㊀は「〈碧い」、㊁は「〈蒼い」とも書く。 **―とり[2]-[0]【―鳥】 幸福の象徴とされる〔想像上の〕鳥。〔メーテルリンクの童話劇から〕

あおい[0]【〈葵】 ㊀アオイ科に属する、タチアオイ・モミジアオイなどの植物の総称。多く、園芸種として栽培される。〔広義では、他の科に属するテンジクアオイ・フタバアオイなどアオイの名のつく植物をも指す〕 ㊁紋所の名。〔狭義では、ミツバアオイにかたどった、徳川氏の紋所を指す〕 かぞえ方 ㊀は一株・一本 **―まつり**[4]【―祭】 京都の賀茂(カモ)神社の祭り。「賀茂祭[3]」の通称。〔昔は四月の中の酉の日に行なったが、今は五月十五日〕

あおいき[0]【青息】 苦しんだり悩んだりしてつくため息。 **―といき**[5]【―吐息】 困難を乗りこえたり心配事を解消したりすることが出来そうもなく、苦しみ悩む様子。

あおいろ[0]【青色】 青い色。 **―しんこく**[5]【―申告】〔事業所得者が青色の申告用紙で行なう〕所得税・法人税の申告方式。税額算定の基礎として、所定の帳簿への記帳を条件として、専従者控除や損金算入などが認められる。

あおうなばら[4][3]【青《海原】〔雅〕無限とも思えるほどの広大な海。 表記 ⇩付表「海原」

あおうま[0] ■一【青馬】 つやの有る黒い毛色の馬。略して「あお」とも。 ■二【《白馬】〔雅〕白い毛色の馬。「―の節会(セチエ)」

あおうみがめ[4][3]【青海亀】 暖かい海にすむ大亀。四足はひれ状。背中の甲は、べっこうの代用。「正覚(ショウガク)坊」とも。 かぞえ方 一匹

あおうめ[2]【青梅】 未熟で青いウメの実。

あおえんどう[3]【青〈豌豆】 グリーンピース。

あおがい[2][0]【青貝】 ㊀真珠のような光沢を持つ貝。螺鈿(ラデン)用。 ㊁アワビの貝の裏を磨いたもの。ボタンなどに使う。 かぞえ方 ㊀㊁とも一枚

あおがえる[3]【青〈蛙】 アマガエルに似た大形のカエル。背中は一面緑色。〔アオガエル科〕〔広義では、トノサマガエル・アマガエルなど、緑色のカエルを指す〕 かぞえ方 一匹

あおかび[0]【青〈黴】 もち・のりなどに生える緑色のカビ。このうちの一種はペニシリンの原料。

あおがり[0]【青刈(り)】〔家畜の飼料や緑肥とするために〕実が熟さないうちに刈り取ること。「―大豆[5]」

あおき[0]【青木】 山野に自生し、また庭木とする常緑低木。春に紫がかった緑色・小粒の花を開く。雌雄異株(イシュ)。幹は緑色。〔ミズキ科〕 かぞえ方 一株・一本

あおぎなこ[3]【青《黄粉】 薄緑色の上等なきなこ。青大豆を煎(イ)ってひいたもの。 かぞえ方 小売の単位は一袋

あおぎ・みる[4]【仰ぎ見る】（他上一） ㊀顔を上げて、上の方(のもの)を見る。「雪の富士を―」 ㊁高い存在として、畏敬(イケイ)の念をもって見る。「―我が師」

あおぎり[0][2]【青〈桐】 庭木・街路樹に用いる落葉高木。葉はキリに似て、幹は緑色。〔アオギリ科〕 表記 古来の用字は、「〈梧桐〉」。 かぞえ方 一株・一本(イッポン|ヒトモト)

*__あお・ぐ__[2]【仰ぐ】（他五） ㊀〈なに・どこヲ―〉 顔を上げて、上の方を見る。「天を仰ぎ、地に伏す」 ㊁〈だれヲなんだト―〉 自分の手本とすべき人として尊敬し、その生き方や考えを見習う。「…を指導者と―/師として―/武人の鑑(カガミ)と仰がれる」 ㊂〈だれニなにヲ―〉 △資格や権限を有する(信頼できる)人に頼んで、何かをしてもらう。「△裁可(支持・判断・批判)を―/原料を外地に―〔=外地から入手する〕」 ㊃〈だれヲなにニ―〉 しかるべき人に頼んで、最高の地位に就いてもらう。「総裁に―」 【毒を―】⇩毒

あお・ぐ[2]【《扇ぐ】（他五）〔うちわ・扇などを動かして〕風をおこす。 表記 「〈煽ぐ」とも書く。

あおくさ[0]【青草】 青あおとした草。

あおくさ・い[4]【青臭い】（形） ㊀青菜や未熟なトマトなどを切ったときのにおいがする感じだ。 ㊁経験が乏しいなどして、いかにも未熟だという印象を与える様子だ。「―議論に閉口した」 派 ―さ[4]

あおげ[0]【青毛】 馬の毛色の名。青みを帯びた黒色。略して「あお」とも。

あおこ[0][3]【青粉】 ㊀青のりを粉にしたもの。 ㊁タカナの葉を粉にして、食品の色づけに使うもの。 ㊂堀・池・金魚鉢などに発生し、水を緑色にする、微細な藍藻(ランソウ)類や緑藻類の総称。〔増えすぎると有害となる〕

あおさ[0]【〈石〈蓴】 緑藻類の海藻。浅い海の岩に付き、薄く、平たい。食用。「ちさのり[0][2]」とも。〔アオサ科〕

あおざかな[3]【青魚】 背中の青い魚。例、イワシ・サンマ・サバなど。

あおざむらい[3]【青侍】〔官位の低い者、特に六位の侍が青色の袍(ホウ)を着ていたことから〕年が若くて、頼りがいのなさそうな侍。

あおざ・める[4]【青ざめる】（自下一）〔病気や恐怖心などのために〕血の気を失って、顔が青白くなる。「青ざめた顔」 表記 「〈蒼ざめる」とも書く。

あおじ[0] ■一【青地】 織物などの地(ジ)の青いもの。 ■二【青磁】 ⇩せいじ(青磁)

あおしお[0]【青潮】 海底の有機物が腐敗して酸素をほとんど奪われた状態の水塊が、海面に上昇し、青白く見える現象。⇩赤潮

あおじそ[0]【青紫〈蘇】 シソの一種。葉は緑色。夏から秋にかけて白い花をつける。香りが強く、刺身のつま、一夜漬などに使う。食品名は、おおば。〔シソ科〕 かぞえ方 一本。葉は一枚

あおじゃしん[3]【青写真】 ㊀青地に白く設計図・文字などを焼き付けた複写写真。「―を△描く(示す)」 ㊁新規事業などについて立てたおおよその構想。「街の中心部の再開発はまだ―の段階だ」

あおじろ・い[4]【青白い・〈蒼白い】（形） ㊀白色の中

にかすかに青みを含んでいる様子だ。「月の―光」 ㊁〔恐怖や病気などで〕青ざめた様子だ。「―顔」 派 ―さ[3]

あおしんごう[3]【青信号】↕赤信号 ㊀進行可能などを知らせる(青または緑色の)信号。 ㊁危険があるなどして一時的に停止していたものの安全が確認されて、△着手(続行)可能な状態になること。また、その知らせ。「補修が終わり、工事再開の―が出た」

あおすじ[0]【青筋】 皮膚の上から青く透いて見える静脈。「―を立てて怒る」 かぞえ方 一本

あおせん[0]【青線】 ㊀青い色の線。 ㊁〔↑青線地帯[5]〕 赤線地帯の周辺にあって、営業許可を得ずに売春を行なっていた飲食店街。

あおぞら【青空】 ■一[3] 青く晴れた空。 ■二（造語） 戸外で行なう。「―教室[5]・―市場[5]・―駐車[5]〔=道路を車庫代りにする違法駐車〕」

あおた[0]【青田】 稲の青あおしている田。〔十分に実らない田の意にも用いられる〕 **―がい**[0]【―買(い)】 ㊀稲のとりいれ前に、収穫高を見越して前もって(安く)買うこと。〔戦前、米穀商などが、金に困った米作農家を相手に行なった〕 ㊁〔俗に〕最終学年に△なって間も無い(いたる前の)学生と入社契約を結ぶこと。〔誤って、「青田刈り[0]」とも言う〕

あおだいしょう[3]【青大将】 ヘビの一種。からだは緑色を帯び、長さ二メートル近くなる。無毒。 かぞえ方 一匹

あおだけ[0]【青竹】 幹の(まだ)青い竹。

あおだたみ[3]【青畳】 新しくて表が青みを帯びた畳。

あおだち[0]【青立(ち)】〔成熟の時期が来ているのに〕天候不良などのために、稲が未熟のままであること。また、その稲。

あおっぱな[0][4]【青っ〈洟】 子供などが垂らす、青い鼻汁。

あおてんじょう[3]【青天井】 ㊀青空を天井に見立てて言う言葉。野天(ノテン)。 ㊁株式相場などで、際限なく値上がりを続けること。「株価は―」〔青空とも言う〕

あおどうしん[3]【青道心】 仏門に入り、僧になったばかりで、十分に修行を積んでいない人。

あおな[0][2][1]【青菜】 コマツナ・ホウレンソウ・白菜など、葉の部分を食べる野菜。 【―に塩】 元気が無く、しおれている様子の形容。

あおにさい[3]【青二才】〔「二才」は、二歳魚の意〕成人に△達する(達した)年ごろなのに、社会的な経験の乏しい男。〔接する人に生意気だという印象を与える者に対して用いる〕 運用 自分に関しては、未熟者と謙遜(ケンソン)して言う。

あおの・く[3]【《仰のく】（自五）「あおむく」の変化。 他動 仰のける[4]（下一）

あおのり[2][0]【青〔海〈苔〕】 緑藻類の海藻。浅い海の岩などに付き、筒状で細長い。干して食用とする。かおりがよい。〔アオサ科〕 かぞえ方 小売の単位は一瓶・一袋

あおば[1]【青葉】〔初夏の〕緑色の(若)葉。

あおばえ[0][2]【青〈蠅・〈蒼〈蠅〉】 青黒い、大形のハエの俗称。〔人にしつこくつきまとう者のたとえにも用いられる〕 かぞえ方 一匹

あおびかり[3][0]【青光】―する（自サ） 青緑色△の光(に光ること)。

あおひとぐさ[4]【青人草】〔雅〕国民。〔人がふえるのを草の生長にたとえた語〕

あおびょうたん[3]【青〈瓢簞〉】 未熟で青いヒョウタン。〔俗に、顔が長く、やせて顔色の悪い人の意。軽い侮蔑(ブベツ)を含意して用いられる〕

あおぶくれ[0]【青膨(れ)】―する（自サ） 顔色が悪くて、むくんだように見える△こと(人)。

あおぶさ[0]【青房】〔すもうで〕土俵の上方から吊(ツ)り下げた屋根の北東部から垂らした青い房。もと「青柱[3]」の有った位置。⇩赤房・白房・黒房 かぞえ方 一本

あおまめ[0]【青豆】 ㊀緑色で大粒のダイズ。「青大豆[3]」とも。 ㊁グリーンピース。青えんどう。 ㊂枝豆。 かぞえ方 ㊀の小売の単位は一袋

あおみ[0][3] ■一【青み・青味】 ㊀青いと感じられる△状態(度合)。「―を帯びる」 ㊁青い色。 ㊂青くさい△こと(味やにおい)。 ■二【青み・青味】〔料理で〕吸い物などに入れる、緑色の野菜。 ■三【青身】 サバ・イワシなど、青魚の身。⇩白身・赤身

あおみどり[3]【青緑】 ㊀緑色がかった青色。 ㊁⇩あおみどろ

あおみどろ[3]【青《緑・〔水綿〕・青味泥】 緑藻類の水草。トロロコンブを溶かしたような状態で緑色。水田・池・沼など淡水に生じる。あおみどり。〔ホシミドロ科〕

あお・む[2]【青む】（自五） 青い色になる。「青み渡る」

あおむ・く[3]【《仰向く】（自五）〔首を後方に傾けて〕上を向く。↕うつむく 名 仰向き[0]「―加減」

あおむけ[0]【《仰向け】〔人が〕顔や横たえたからだを上に向けた状態。「―に横たわる」 動 仰向ける[5]（他下一）

あおむし[2]【青虫】 チョウ・ガの幼虫の中で、長い毛やとげが無いものの俗称。比較的小形。 かぞえ方 一匹

あおもの[2]【青物】 ㊀野菜類の総称。「―市場(バイチ)[5]」 ㊁青魚(ザカナ)。

あおやか[2]【青やか】―な・―に 青い色が鮮やかに感じられる様子だ。

あおやき[0]【青焼(き)】「青写真」の俗称。

あおやぎ[0]【青《柳】 ㊀青あおと茂ったヤナギ。 ㊁バカガイ(のむき身)。すしなどに使う。

あおり[3]【泥障】 馬具の名。鐙(アブミ)と馬のわき腹との間に下げる、泥よけの△皮(毛皮)。 表記 古来の用字は「〔障泥〕・〔泥障〕」。 かぞえ方 一枚

あおり【〈煽(り)】 ■一[3] ㊀あおること。「世界的な穀物不足の―を〔=影響をまともに〕受ける」 ㊁〔写真で〕〔レンズのゆがみを修正するために〕撮影・焼付けの時に、フィルムや印画紙の面を△上下(左右)に少し曲げて、フィルムに映った像を変化させること。〔転じて、特殊効果をねらい、被写体をゆがんだ状態に写すことをも指す〕 【―を食う】 ㊀強風や、通過列車などで引き起こされた風圧をまともに受けなどして、転んだり倒れたりする。 ㊁激しい変動の影響を受けて、好ましくない事態を招く。 ■二（造語） 動詞「煽る」の連用形。「―行為[4]・―どめ[0]」 **―た・てる**[5]【―立てる】（他下一） 先見の明のある人から見れば必ずしも歓迎すべからざる状態を引き起こす。「△不信感(反目)を―」

あお・る[2]【〈煽る】 ■一（他五） ㊀風を起こして、火の勢いを強める。「火を―」 ㊁強い風が吹いて、物を上下左右などに激しく揺り動かす。「強風に煽られる」 ㊂〔むち打ったりして〕馬を急がせる。 ㊃そそのかすなどの手段によって、そのような気持を起こさせ、ある状態が生じるように仕向ける。「△民衆(競争心・景気・危機感・世論)を―」 ㊄〔相場を自分に有利になるように操作する手段として〕一度に大量の買い付けをする。 ㊅〔酒などを〕〔あおむいて〕一気に飲む。 ㊆〔カメラを〕広角レンズで、下から上に向けて写す。 表記 ㊅は普通、「〈呷る」と書く。 ■二（自五） 風を受けて揺れ動く。「風で戸があおっている」〔⇩煽り■二〕

あか ■一[1]【〈閼伽〉】〔梵(ボン)語で、もと仏に供える香水(コウズイ)を

盛る器の意〕 △仏(お墓)に供える水。「ー桶(オケ)[0][3][2]・ー棚[0]・ー井[0]」 かぞえ方 一桶(ヒトオケ) ■二[2]【〈淦】 舟の底にたまった(汚ない)水。〔■二は、■一に基づく忌み言葉とも、垢(アカ)の意とも言う〕 かぞえ方 一杯

*あか[1]【赤】 ㊀人間の血や、燃える火に代表される明るい色。〔三原色の一つ。植物学では、花の色の二大区分として青と対比させる〕「ー鬼[0]・ー御飯[3]〔=せきはん。あずき飯〕」 ㊁紅色・桃色・濃いだいだい色・明るい茶色など、「赤㊀」に近いと感じられる色。「ー犬[0]・ー花[0]・ー毛」 ㊂停止・危険を知らせる信号の色。「ー信号」 ㊃校正・簿記などに用いる赤色の字。「ゲラ刷りにーを入れる」 ㊄〔赤い色を旗印にしたことから〕共産主義(者)。「かつてはマルクスの『資本論』を持っているだけでーと言われた」 ㊅〔多く接頭語的に〕それ以外の何物でもないことを表わす。「ー〔=全く〕の他人/ー恥・ー裸」

*あか[2]【〈垢】 ㊀洗ったり拭(フ)き清めたりしない皮膚に、汗・脂・ほこりが交じって出来る汚れ。「旅のーを流す/つめのー〔=ほんのわずか〕ほども分けてやらない/ー付(ヅ)く〔=垢で汚れる〕」 ㊁水あか。 表記 ㊁は、「〈淦」とも書く。

あか[1]【《銅】 「赤金(アカガネ)〔=銅〕」の略。「ーのなべ」

あかあか[3]【赤赤】(副)ーと まさに赤一色だという印象を与える様子。「ーと燃える炭火」

あかあか[3]【明明】(副)ーと 光の明るさがきわだって感じられる様子。「ーと灯(ヒ)をともす」

あかあざ[0]【赤〈痣】 ㊀打身のために皮膚の下に血がにじんで出来る、赤い痣。㊁血管がはれて、皮膚が赤い痣のようになるもの。〔医学的には「血管腫(シュ)[3]」を指す〕 ⇩あおあざ

**あか・い[0]【赤い】(形) 赤の色が認められる状態だ。「ー夕日が沈む/恥ずかしくて顔が赤くなる」 ↔青い 派 ーさ[0]
ーはね[0]-[0]【ー羽根】 共同募金に協力したしるしとして渡される、赤く染めた鳥の羽根。 かぞえ方 一本

あかいわし[3]【赤〈鰯】 〔イワシを塩漬けにすると赤みを帯びるので〕塩漬けのイワシ。〔赤くさびた刀や 病的に赤い目の意にも用いられる〕

アカウンタビリティー[6]〔accountability=責任ある〕 社会の了解や合意を取りつけるために、行政機関や企業が情報公開をする責任。説明責任。

アカウント[0][2]〔account〕 ㊀銀行預金口座。〔簿記での〕勘定。㊁コンピューターやネットワーク システムを利用するための固有のIDナンバーやその権利。ユーザーの識別や、個別の情報の管理のために用いられる。

あかえい[2]【赤〈鱝】(ーエヒ) 四国などの海にすむ菱(ヒシ)形の魚。背中は薄黄色で、腹は白色。食用。〔アカエイ科〕 かぞえ方 一尾・一匹

あかがい[2]【赤貝】(ーガヒ) 海でとれる二枚貝の一種。貝殻は心臓形、肉は赤くて美味。〔フネガイ科〕 かぞえ方 一枚

あかがえる[3]【赤〈蛙】(ーガヘル) 背中は赤茶色で、斑点(ハンテン)の有るカエルの総称。〔アカガエル科〕 かぞえ方 一匹

あかがし[0]【赤〈樫】 高さ一〇メートルに達する常緑高木。木材は赤色で、堅くて用途が広い。〔ブナ科〕 かぞえ方 一株・一本

あかがね[0]【《銅】 〔「赤金(アカガネ)」の意〕「銅(ドウ)」の和語的表現。略して「あか」とも。「ー色[0]」

あかかぶ[0]【赤〈蕪】 根の表皮(から内部まで)が赤紫色をしたカブ。漬物・酢の物・サラダなどに用いる。

あかがみ[0]【赤紙】 赤色の紙。〔差押えの封印証書や かつての軍隊の召集令状の俗称〕 かぞえ方 一枚

あかぎ[0]【赤木】 ㊀皮をはいだままの材木。↔黒木 ㊁赤い色の木材。カリン・シタン・ウメなど。

あがき[3]【《足〈掻き】 〔動詞「あがく」の連用形の名詞用法〕 △足掻く(足掻こうとする)こと。「ーが取れない〔=ⓐ動こうとしても、自由に動けない。ⓑ打つ手が無くどうしようもない〕/最後のーを試みる/悪(ワル)ー」

あかぎれ[0]【〈皹・〈皸】 〔赤く腫(ハ)れて切れる意〕〔寒さや労働のため〕冬、寒風にさらされたり 冷水に浸されたりして、手足の皮膚に出来る、ひどい ひび。

あが・く[2]【《足〈掻く】(自五) ㊀〔馬などが前に進もうとして〕前足で地面をかく。㊁〔押さえられたり 縛られたりした人などが〕自由になろうとして、やたらにからだ(の部分)を動かす。〔「局面を打開しようとして、むだな努力をする」意にも用いられる〕

あかげ[0]【赤毛】 ㊀赤みを帯びた△毛(毛髪)。「ーのアン」 ㊁〔劇で〕西洋人を表わす、赤い毛のかつら。

あかゲット[3]【赤ゲット】 赤い毛布(を羽織って東京見物をした、明治時代の いなか者)。〔西洋の習俗に慣れない洋行者をも指す。例、「(とんだ)ーぶりを発揮する」〕 ⇩ケット

あかご[0]【赤子】 〔皮膚が赤みを帯びていることから〕生まれて間(マ)も無い乳児。「ーの手を△ひねる(ねじる)よう〔=ⓐ無力の者に暴力をふるう形容。ⓑさほど力を用いないで容易に出来る形容〕」 表記 「赤《児」とも書く。

あかこうのう[3]【赤行〈嚢】(ーカウナウ) 〔郵便局で〕書留などの重要な郵便物を搬送するのに用いた赤色の袋。〔今は「赤郵袋[3]」と言う〕 かぞえ方 一袋

あかざ[0]【〈藜】 畑・荒れ地に自生する一年草。若葉は食用、茎はつえにする。〔アカザ科〕「ーの羹(アツモノ)〔=粗末な食事〕」 かぞえ方 一本

あかざとう[3]【赤砂糖】(ータウ) 十分に精製しないままの、赤茶色の砂糖。⇩黒砂糖・白砂糖

あかさび[0]【赤〈錆】 鉄などに生じる、赤色の錆。「ー色[0]」 動 赤さびる[4](自上一)

あかし[0]【《灯】 「ともしび・あかり」のやや古風な表現。「みー〔=灯明(トウミョウ)〕」

あかし[0]【《証〈し】 ㊀証拠。証明。「福音(フクイン)のーをする/友情のーとして」 ㊁後ろ暗くないことの証明。「ーを示す/身のーを立てる」

あかし[1]【明《石】 〔↑あかしちぢみ[4]〕 女性が夏に着る、ちぢみの絹織物。

あかじ[0]【赤地】(ーヂ) ㊀織物の地(ジ)の赤いもの。㊁赤い地色。

*あかじ[0]【赤字】 ㊀収入よりも支出の方が多いこと。また、その数値を示す赤で書いた数字。「ーになる/ーを△出す〔解消する・埋める〕/ーがふくらむ/ーに悩む/ー財政[4]」 ⇩黒字 ㊁校正で誤りを直した字。〔赤色で記すところから〕
ーこうさい[4]【ー公債】 国や地方公共団体が赤字を補うために発行する公債。〔前者を国債、後者を地方債という〕

アカシア[0]〔acacia〕 ㊀熱帯産の常緑高木。ギンヨウアカシア〔=ミモザ〕・アラビアゴムノキなど、種類が多い。〔マメ科〕 ㊁街路樹とするハリエンジュの俗称。「ーの花の咲くころ」 かぞえ方 ㊀㊁とも一株・一本

あかしお[0]【赤潮】(ーシホ) 海面の一部が赤(に近い)色に見える現象。〔プランクトンの異常繁殖によって生じ、魚介類に大きな被害を与える〕 ⇩青潮

あかしくら・す[5][0]【明(カ)し暮(ラ)す】(自他五) 同じような生活△様式(態度)で日びを過ごす。

あかじそ[0]【赤紫〈蘇】 シソの一種。葉の色は赤紫。夏から秋にかけて赤紫色の花をつける。葉を梅干やショウガの色づけなどに使う。〔シソ科〕 かぞえ方 一本。葉は一枚

あかじ・みる[4]【〈垢染みる】(自上一) 衣服などに垢が

【 】の中の教科書体は学習用の漢字，〈 は常用漢字外の漢字，《 は常用漢字の音訓以外の よみ。

染みて、不潔な感じになる。「垢じみたシャツ」

あかしんごう[3]【赤信号】(ーガウ) ↔青信号 ㊀交通上の危険や停止を示す、赤色の信号。㊁危険や危機的状態の△しるし(知らせ)。「△会社存続(水不足)のーがつく」

あかしんぶん[3]【赤新聞】 〔もと、薄赤色の用紙を使ったことから〕興味本位の暴露記事を主とする、低俗な新聞。

あか・す[0]【明(カ)す】(他五) ㊀それまで隠していた事を相手に知らせる。「△名前(手の内)をー/秘密をー」 ㊁相手の知らない自分に関することなどを、間違いなくそうだと説明する。「身の潔白をー〔=証明する〕」 ㊂通常とは異なる状況で(眠ることなく)夜を過ごして、朝を迎える。「△飲んで(友と語らって)夜(ヨ)をー/道に迷い、山中で一夜を明かした」 表記 ㊁は、「《証す」とも書く。
【鼻をー】 ⇩鼻

あか・す[2]【飽(カ)す】(他五) 飽きさせる。「飽かせる[3](下一)」とも。「一時間は人を飽かさないでしゃべる」
【△金(カネ)(時間・暇)に飽かして】 普通の人にはそれだけの余裕が持てない△お金(時間・暇)をふんだんに使って。

あかず[2][3][0]【飽かず】(副) ㊀「飽きることなく」の意のやや古風な表現。「ー〔=じっと〕眺める」 ㊁「〔期待に反して〕不満が残る様子」の意のやや古風な表現。「なおー思う」

あかずの[0]【開かずの】(連体) 閉ざされたままの。「ー間(マ)〔=開いたことが無い部屋〕/ー〔=一度遮断機が下りて閉まるとなかなか開かない〕踏切(フミキリ)」 表記 「明かずの」とも書く。

あかせん[0]【赤線】 ㊀赤い色の線。㊁〔↑赤線地帯[5]〕営業許可を得た売春目的の特殊飲食店が集まっていた地域。一九五七年以降廃止された。

あかだし[0]【赤だし】 赤みそを用いた関西風の みそ汁。〔魚のあら汁で赤みそを溶かし、魚肉を入れるのが本来の調理法。また、広義では、八丁(ハッチョウ)みそを用いたものを含めることもある〕

あかちゃ・ける[4]【赤茶ける】(自下一) 〔日に焼けたりして〕くすんだ茶色になる。「赤茶けた畳」〔強調形は「赤っ茶ける[5]」〕

あかちゃん[1]【赤ちゃん】 「赤ん坊」の親しみを込めた呼称。

あかちょうちん[3]【赤《提《灯】(ーチヤウー) 〔目につきやすいように店頭に赤い提灯をぶら下げることから〕「居酒屋」の俗称。あかぢょうちん。

あかチン[0]【赤チン】 〔「チン」はヨードチンキの意〕マーキュロクロムの水溶液の俗称。〔ヨードチンキとは化学的組成が全く異なる〕

あかつき[0]【暁】 〔「明時(アカトキ)」の意〕 ㊀「夜があけるかどうかのころ」の意の古風な表現。㊁〔そうなる保証はないが〕将来ある事が実現した、その時。「石油にかわるエネルギー源が実用化されたーには、人間の生活は大きく変わるだろう」
ーやみ[4]【ー闇】 明け方近くになっても月が出ておらず、あたりが暗いこと。〔陰暦十四日ごろまで〕

あがったり[4]【上(ガ)ったり】 〔「あがる」は、だめになる意〕事業がうまくいかず、どうしようも無い状態。「商売ーだ」

あかつち[0]【赤土】 赤茶色で、粘り気のある土。〔鉄分を多く含む〕

アカデミー[2][3]〔フ académie〕 ㊀〔欧米諸国で〕学問・芸術を総合的に指導する立場にある、権威の有る機関。〔訳語は「翰林(カンリン)院・学士院」〕 ㊁権威の有る大学・研究所の称。
ーしょう[4]【ー賞】(ーシヤウ) アメリカで映画・映画人に与えられる賞の中で、最も権威の有るもの。一九二七年創設。

アカデミズム[4]〔academism〕 官学における講壇的な学風や芸術活動における伝統的・高踏的な作風。

アカデミック[4]〔フ académique〕(ーな) ものの見方や言動などが、△学問的(学究的)な様子だ。〔非実用的というニュアンスを込めて用いることもある〕「ーな立場からの情勢分析」
ーハラスメント[8]〔和製英語 ↑academic＋harassment〕 大学や研究機関で、指導的な立場にある人が学生や所員に対し、権力を悪用して(性的な)嫌がらせや差別的な扱いなどをすること。アカハラ。

あかてん[0]【赤点】 「落第点」の俗称。〔赤字で書くところから〕

あかでんしゃ[3]【赤電車】 〔路面電車の〕終電車。方向標識に赤い電灯をつける。略して「赤電[0]」とも。〔その一つ前は「青電車[3]」。バスについても「赤バス・青バス」と言う〕

あかとんぼ[3]【赤とんぼ】 小形で赤いトンボの総称。アキアカネは代表的な種。夏から初秋にかけて群れをなして飛ぶ。

あがな・う[3](アガナフ)(他五) 〔「なう」は接辞〕 ■一【《購う】 「買う」意のやや古風な表現。「残りのお金で書籍をーことができた」 ■二【〈贖う】 相応の代償を払って、△罪や失敗を償う(本来の望ましい状態を獲得する)こと。「△命(血)でー」 名 贖い[0]

あかぬ・ける[4]【〈垢抜ける】(自下一) 〔言動・人に接する態度や髪型・服装などが〕都会風に洗練されている。 名 垢抜け[0]「ーした女性」

あかね[0]【〈茜】 〔赤根の意〕山野に生える多年生のつる草。根から、黒みを帯びた赤い染料をとる。また、薬用。〔アカネ科〕「ー色[0]」 かぞえ方 一本

あかのまんま[4]【赤の《飯】 〔赤飯(セキハン)の意〕植物のイヌタデの異称。「あかまんま[3]」とも。〔つぼみが赤飯に似ている〕

あかはじ[0]【赤恥】(ーハヂ) 〔「恥」の強調表現〕〔人前でかき〕耐えがたい屈辱感にさいなまれる恥。あかっぱじ[0]。「ーをかく」

あかはた[0]【赤旗】 ㊀〔紅白、二組に分かれた〕赤組の旗。〔昔は、平氏の旗〕 ㊁危険・停止信号の赤い旗。㊂共産党・労働組合などの旗。〔㊀㊁の対義語は、白旗(シラハタ)〕

あかはだ[0]【赤肌・赤《膚】 皮のむけた、赤い肌。「ーの山〔=木や草が全くない山〕」

あかはだか[3]【赤裸】 ㊀身に衣類(に類するもの)を何もつけていない状態。㊁鳥や獣が、毛を全部むしられた状態。

あかばな[0]【赤鼻】 〔酒飲みや病気の人の〕一般の人に比べて赤く見える鼻。〔軽い侮蔑(ブベツ)を含意して用いられることがある〕「ざくろばな」とも。

アカハラ[0] ⇩アカデミック ハラスメント

あかはら[0]【赤腹】 ㊀腹の赤い小鳥。〔ツグミ科〕 ㊁魚のウグイの異称。〔産卵期に腹が赤くなる〕 ㊂イモリの俗称。 かぞえ方 ㊀は一羽。㊁は一尾・一匹。㊂は一匹

あかびかり[3]【〈垢光】ーする(自サ) 〔着物などが〕垢や手ずれで光って見えること。「ーのする袖口(ソデグチ)」

あかぶさ[0]【赤房】 〔すもうで〕土俵の上方から吊(ツ)り下げた屋根の南東部から垂らした赤い房。もと「赤柱[3]」の有った位置。⇩青房・白房・黒房 かぞえ方 一本

あかふだ[0]【赤札】 ㊀特価品や見切り品(につける値札)。㊁売約済みの札。 かぞえ方 ㊁は一枚

あかぶどうしゅ[4]【赤《葡《萄》酒】(ーダウー) 濃い赤色をした葡萄酒。△赤ブドウを果皮と共につぶして(白ブドウに赤ブドウの果皮を加えて)作る。「赤ワイン」とも。 かぞえ方 小売の単位は一本

アガペー[1][0]〔ギ agapē〕〔キリスト教的な〕神の愛。「アガペ[1][0]」とも。↔エロス

アカペラ[2][0]〔イ a cappella=礼拝堂風に〕 無伴奏の合唱(曲)。

** * は重要語，[0] [1]… はアクセント記号，品詞の指示の無いものは名詞および いわゆる連語。